

平成23年2月5日

北海道師範塾「教師の道」に参加させていただいて

せたな町立若松小学校

教頭 佐々木 朗

1. 一本の電話から

「佐々木氏、ホームページを頼まれたんですけど、どうやったらいいんですか？」一本の電話から、北海道師範塾「教師の道」参加への第一歩が始まった。電話をかけてきたのは、三石中学校教頭小山内先生である。私の大学院（h18終）の同期生である。年も専攻も違うが、同じ教員同士ということもあって、意気投合して、一緒に勉強してきた仲である。彼は職場に通いながら自力で、私は道教委の派遣でたつぷりと時間はあったはずなのであるが、ぎりぎりにならないと火がつかないのは昔からで、正月2日から、しーんと静まりかえった大学院生室で、机を並べて、修士論文を書いていたのである。同窓というのとは年が違っても、やっぱり心が通じ合う仲間。今でも年に何回かは、交友を深めている。

そんな彼からの電話だったもので、「アカウントは？パスワードは？、それでどんなページを作るの？」などと何十分かやりとりしていたわけであるが、ホームページ作りはそんなに難しくはないとはいえ、電話で話ただけで、簡単にできっこはないわけである。それで、彼の手元にある資料が次々とファイルで送られて来て、会員でも何でもない時に、パスワードまで教えてもらい、仮のホームページを立ち上げた。そのうちに依頼した小山内先生経由ではなく、

まだ面識もない鈴木事務局長さんからも、いろいろアドバイスを受け、開塾記念講座にいったわけである。

2. パソコンと私

私は、大学院でも情報教育を専攻するなど、私の学部時代からパソコンをいじっていた。学校にパソコンが入る前から、パソコンづかいであり、珍しくパソコンが学校に入って、「子どもにパソコンなんて非人間的だ。」などと、学校にパソコンが入る頃いろんなことを言われながらも、私は、自らプログラムを開発し、実践し、それを発表してきた。今50歳という年齢になって、自分が若い頃から見ると、おじさんで、新しいものには疎くなる年なのかもしれない。でも、情報モラルのこと、情報活用の実践、そして、パソコン全般の操作、パソコンのメンテナンスなど、まだまだ第一線で活躍できているのかなあと思っている。ホームページもいくつかの団体のメンテナンスをやっており、まあ、「やれる」部類には入るのかなあと思っ、がんばることにした。

自分のいいところでもあり、悪いところでもあるのが、頼まれたら断らないということがある。今まで頼まれて「いやだ。」と言ったことは、決して自慢にはならないが、自分の記憶には一度もない。そんなもので、

あっちこっちに首をつっこんで（中には中途半端になったものもあるが）、いろんな人とも知り合うことができた。特にコンピュータ関係では、渡島にいる時は、あっちの学校、こっちの学校、あっちの家、こっちの家から、「プリンタが繋がらない。」「無線LANが、どうもうまくいかない。」「ウイルスにやられたみたい。」「立ち上げたら画面が真っ黒」などという依頼が来て、それを絶対断らないで、直しに行くもので、かなり引き出しの数は増えた。今では、どんな状態になってても、「何とかなるんじゃない。」ぐらいに思って出かけられる。教員の価値とは関係はないのだろうが、いろんな職種の人と交流できているし、もちろん情報教育関係でも、けっこう人のネットワークはある方かなあと思う。

3. これからの若者に期待すること

話はとびとびになるが、大学院を修了して（大学院時代もそうだったが）、教員を育てることの大切さを痛感した。たまたま、機会があつて、授業作りに関する授業を非常勤講師という形で持たせてもらった。最後の授業で、私は、学生に、「企画力と実行力」みたいな話をした。この先教員になるか、別なところに行くかわからないが、まずは、そこですべきことを吸収すると共に、「ああ、こんな感じでやればいいんだ。」で終わってしまうのではなく、こんなふうにしたらもっと効果があがるんじゃないかな。こんなことをやってみたらおもしろいんじゃないかな。っていう考えを持ち、それを企画し、実行していくことを大切にもらいたいと思っている。それと、そのためには、自分を磨くこと、特に学生時代は、い

ろんな経験をする事、自分を鍛えるという意識を常に持つこと、大学時代は人生のうちで、一番時間があつて、一番やりたいことが自由にできる時間でもあるのだからというような話をした。

自分自身もその生き方をしたいということで、私の名刺の裏には、「人生で後悔するのはしてしまったことではなく、しなかったことである。」「現状維持は後退であり、常に新しいものを求めていく」と偉そうに書いているわけである。

4. すばらしいメンバーの諸先輩たちと巡り会えて

ということで、開塾記念講座が行われた1月13日、14日までには、吉田塾頭、鈴木事務局長とは、毎日のようにやりとりする関係になり、ホームページも、(手前味噌だが)だんだんすてきになってきた。

私は講座では、最終の小山内教頭先生の話のみしか聞くことができなかったが、その後、塾頭、事務局長と昼食を囲みながら、懇談する機会があり、理事にも入れていただき、本格的な活動をする事になった。

こんなことを言ったらたいへん失礼に当たるかもしれないが、道教委のトップにいる方々とは、お話したこともないし、合ったこともない。せいぜい聞いても役職名と名前ぐらいである。でも、塾頭はじめ、そうそうたるスタッフの皆さんと顔を合わせて懇談させていただいて、そこには「人」がいたなあという気持ちである。それぞれの方々が、いろいろな役職を経験しながら、北海道教育の中心に立ち、これからの北海道のことを真剣に考え、行動しているんだということに、ハッと気づかされた思いで

ある。道教委のビルに何十人、何百人働いているのかは、よくわからないが、道教委っていうひとまとまりがあるんじゃないかと、そこには、一人一人の人がいて、それぞれが、「北海道の子どもたちをどう育てていったらいいんだろう。」って真剣に考えているんだということに気づいた。

「ぼくたちほめられて伸びるタイプです。」というコマーシャルがあったが、自分にぴったりである。いつも塾頭さん、事務局長さんには、ねぎらいの言葉をかけていただき、自分はとても気持ちよく仕事ができている毎日である。自分自身も100の仕事が与えられたら、120位の仕事をすることが信頼につながると思ってがんばっているのであるが、「人をほめる」って大事なことでなあと思っている。

機会あって与えられた仕事である。教育実践をどんどん掲載し、教育技術はもちろん、教員としての「心」を多くの皆さんに伝えていければなあ、今も、「あんなことやれるかなあ。」などと頭を巡らせている状態である。

5. 会と共に歩む

2月に入り、塾生の募集も開始した。一日何通かの申し込みが、私の所へも飛んできている。緩やかなスタートかもしれない。今は、夜明け前のほんのり東の空が薄明るくなっている状態かもしれない。でも、もう少したつと、真っ赤な太陽が顔を出し、大地を明るく照らす時が来る。北海道の大地を明るく照らし、次代を育てる若者たちをしっかりと育てる教員を育て行くためにも、この会の担う役割はとても大きいものと思う。

現代の社会においてホームページの果たす役割はとても大きい。私は、理事の皆さんのご指導を受けながら、また、自分なりに考えたアイデアを申し出ながら、訪れた人が、教育への情熱を奮い立たせる何かをつかむような情報が掲載されているページ作りにがんばっていこうと思う。

自分は、小さな学校のまだ二年目のペーパーの教頭である。私自身も、まだまだ学ばなくてはならないことがいっぱいある。この師範塾の先輩たちにしっかりついていきながら、力のある教師でありつづけるよう、がんばっていきたい。